

8月3日（金）

## ないじえる芸術共創ラボ 古典インタプリタ日誌 梁亜旋さんWS 文学に登場する妖怪や神様

### 1,2 回目のご来館

梁亜旋<sup>りょうあせん</sup>さん2回目のWSでは、当初からご関心を抱いておられた、民衆の間で昔から信じられている物語やキャラクターについて扱いました。

### 2, 百鬼夜行絵巻—何年生きると妖怪になれる？—

日本で古くから信じられてきた俗説のひとつに、「道具や器物が99年生きると妖怪（付喪神<sup>つくもがみ</sup>）になる」というものがあります。

その付喪神たちが夜中に練り歩くという俗信もあり、その様子を描いた絵巻を「百鬼夜行絵巻」などと呼んでいます。今回は、当館に所蔵されている絵巻をご覧くださいことにしました（ヨ3-25）。

道具のような動物のような人間のような……愉快的な姿で練り歩く様子は、怖いというよりもおかしみを抱かせます。

梁さんは、付喪神の姿形に加え、色使いにも注目されていました。この絵巻は江戸時代頃に作られたと想定されますが、現代的にも感じる鮮やかな色が用いられており、目を楽しませてくれます。

また、日本では99年の経過で道具が付喪神になるのに対して、中国では1000年たつと神様になるという俗信があるそうです。中国の

長い歴史から考えると、99年では神様になるのには短すぎるのでしょうか。



8月3日（金）

### 3, 絵本に出てくる妖怪や神様

また、このような俗信やキャラクターは、子供用の絵本の題材としてよく登場します。そこで、江戸時代につくられた絵本（草双紙<sup>くさごうし</sup>）をご紹介させていただきました。

たとえば『化物よめいり』という作品では、化物たちの婚礼や出産が描かれます。化物の世界の愉快的な様子（天狗が鼻で橋をつくったり、台所の道具たちが自分の身体で料理をしたりする）を楽しめるとともに、婚礼の流れが分かるという教育的な一面もあります。

また、梁さんは当初七福神のモチーフに関心を持っておられたので、七福神が登場する草双紙もいくつかご紹介させていただきました。これらの作品では、神様達が人間のように正月の遊びを楽しんだり、失敗したりする姿が描かれることが多く、親しみ深いキャラクターとして受け止められていたことが分かります。

梁さんは、こういった作品の内容だけでなく、どのような人たちがそれらをつくり、読んでいたのかにも関心を抱いておられましたので、草双紙の歴史や享受の在り方についても解説させていただきました。

